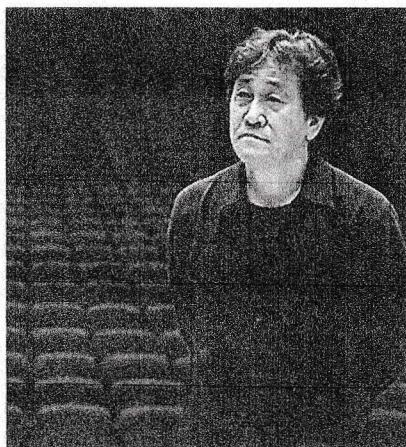


相馬思う姿 AIで復活



俳優・映画監督 塩屋俊さん

東日本大震災直後の相馬市の医療現場を舞台にした演劇「HIKOBAE」を制作し、公演期間中に56歳で亡くなつた俳優・映画監督の塩屋俊さんをイラストでよみがえらせた映像作品が今月、完成した。相馬市にライブハウスをつくりたいという塩屋さんの遺志を引き継いだ知人の男性が、十三回忌に合わせて「監督の思い出を何かの形に残したい」と制作した。(葉袋大輝)

■13年に死去

塩屋さんは自身の映画作品を相馬市で上映したのをきっかけに、2010年頃から伝統行事「相馬野馬追」を題材にしたドキュメンタリーフィルムの制作に着手した。だが、翌年の震災で制作は中断に追い込まれた。

その一方で、新たに手がけたのが舞台作品の「HIKOBAE」だった。震災と原発事故の混乱の中、病院にとどまり、患者の治療にあたつた医師や看護師の姿を描いた。全国各地や米ホールで公演の準備をする場面が描かれ(ブルーオーシャンスターズ提供)。

生前の塩屋さんが願つていたのが、「震災で傷ついた相馬市に人が集まる場所を」とライブハウスをつくった。被災地を音楽で盛り上げようと、俳優の松たか子さんら著名なアーティストも公演をしてきた。定期的にイベントが開かれるようになり、相馬に引き継いだのが、相馬市にいた。定期的にイベントが開かれた。定期的にイベントが開かれた。定期的にイベントが開かれた。

青田さんは「塩屋監督は、舞台作品を通じて震災後の相馬の人たちの心を癒やしてくれただけでなく、相馬の地に色んな人の集まる場所が生まれるきっかけもつくれてくれた」としのぶ。映像は来年、音屋ホールが10周年を迎えるのに合わせてファンに披露することも検討する。塩屋さんの妻にも映像を届ける予定で、青田さんは「被災地の相馬といふ意味で、『江戸の火事焼け』を始めた同市の建設会社の社長、青田由広さん(70)が評判を呼んだが、13年6月、

遺志継いだ男性 映像制作



塩屋さんの遺志を継いで開いた「音屋ホール」で演奏する青田さん(6月28日、相馬市で)

で見てみたい」と思った。知人のつてで知り合った都内で映像制作会社を手がける高塩博幸さん(63)に今年6月、映像制作を依頼し、約4分の映像が完成した。

塩屋さんが死後の世界から相馬市に降り立ち、「HIKOBAE」の特別編を音屋ホールで一夜限り上演するストーリー。生成AI(人工知能)を使って塩屋さんら登場人物をイラストにして動かす形の映像で、

いわき市の江戸名地区に興味をもつかけにしようとした。

塩屋さんが死後、世界から相馬市に降り立ち、「HIKOBAE」の特別編を音屋ホールで一夜限り上演するストーリー。生成AI(人工知能)を使って塩屋さんら登場人物をイラストにして動かす形の映像で、

塩屋さんは「大切な人の生前を想像する余白が生まれる。塩屋さんの相馬への思いも伝われば」と語る。

塩屋さんは「被災地の相馬といふ意味で、『江戸の火事焼け』を始めた同市の建設会社の社長、青田由広さん(70)が評判を呼んだが、13年6月、



サンマの炭火焼き
来場者(14日、